石井勲の漢字教室

Ⅰ　私の漢字教室



Ⅱ　漢字教育に生きて

漢字教育十五年

――賛成と反対のなかで――

「幼児にとっては、漢字はかなよりずっと覚えやすい」こと、そして「鳩は鳥よりも覚えやすく、鳥は九よりも覚えやすい」ということの発見から、幼稚園で漢字教育を行うべきであることを主張したのは、昭和四十二年のことである。

ふり返ってみれば、すでに十五年の月日が流れている。この間、幼児回発協会が創設され、私の主張は、井深大会長、鈴木鎮一先生始め、多くの先生方の賛同と支持を得て、その普及に大きな力があったのにもかかわらず、漢字教育の実践幼稚園は、全国の何十分の一にしか及ばない。しかし、十五年間に及ぶ私どもの実践によって、「幼児の漢字教育は是か否か」を論ずる段階は完全に終わっているのである。幼児には、漢字教育が絶対に必要なのである。漢字は、何よりも幼児の能力を大きく開発する力を秘めた道具であり、しかも、幼児は漢字を学ぶことによって失うものは、何一つないのである。それ

らのことはすべて十分に証明済みなのである。

ところが、それが一般にはなかなか理解されにくい。「旧習に泥(なず)んで」それから離れることが出来ないからである。また、それを指導すべき学者たちは「所聞に溺れて」いるものだから、私どもの発表を素直に受け入れることが出来ないのである。

食べてみようともしない者に対して、その食べ物の味を理解させることが不可能であるように、こういう態度の人々に対しては、私どもは実に無力である。だから、進んで仲間になろうという人々には仲間になってもらったが、こちらから「仲間に入ってくれ」とは努めて言わないことにして来た。

また、ひどく見当違いの非難も浴びせられて来た。そのために、実践直前の幼稚園が実践を見合わせる、という例も少なくなかった。それでも、その非難が見当違いであることをあえて弁解せず、「解るまで気長に待とう」という態度を取って来た。

こうして十五年の月日が流れたのである。たった一つの幼稚園の実践から、それも全く四面楚歌の中で始められたこの教育が、今は熱心な多くの先生方の理解と支持を得て、三百余の幼稚園、保育園で実践されるまでに発展して来た。

今、この十五年間をふり返ってみる時、「知る人ぞ知る」という態度で、あえて世の誤解をとく努力をせずに来たが、もうその面の努力をすべき時ではないかと思う。筆を執る所以である。

幼児の漢字教育は適時教育

私の提唱する〝幼児の漢字教育〟は、早期教育の一つだと思っている者が多い。また、英才教育の一つだと思っている者も多い。いずれも間違いである。英才教育は大切であり、必要だと考えている私だが、これは英才教育では絶対にない。早期教育に至っては、私は大反対である。その大反対の早期教育を主張するわけがない。教育は、遅すぎてもいけないが、早過ぎるのもいけないのである。教育には、その内容によってそれぞれを学習するのに員も適した時期があるのであって、それより早めて成功することはあり得ないのである。

幼児の漢字教育は適時教育なのである。幼児期が、一生のうちで最もやすやすと漢字が覚えられる唯一の時期であって、この時期を過ごすと漢字学習が困難になる。いま学校の漢字教育がうまく行かない

のは、漢字学習の適時期を逸したためである。

ところが、この事実が今までの常識と余りにもがけ離れているので、多くの人がこの事実をなかなか信じない。自分が小学校や中学校で苦しんだ漢字が、幼児にやすやすと覚えられるわけがない、というわけである。

私を含めて、世の人々は適時期を外して漢字を学習して来た。だから、「漢字はむずかしい」と心の底からつくづくとそう思うのである。この「適時期を外すと、やさしいものがむずかしくなる」ということが、解りにくいので困る。

鈴木先生のバイオリン教育でもそうだった。まず、「幼児にあのむずかしい曲が弾けるわけがない」と言って否定した。ところが幼児が見事に弾くのを見ると、今度は「幼児にあの曲が理解できるわけがない」と言って難癖をつけるのである。「大人にむずかしいものが幼児には容易に出来る」ということは、このように解りにくいのである。

鈴木先生は、ドイツ留学中、ドイツの子供たちがドイツ語を自由に話しているのを見て、その教育法を発見されたという。母国語の学習は、幼児期だからやさしく習得できるのである。成人してから学習するのだったら、外国語の学習と同じで、むずかしいものになるのである。

これも、「大人にはむずかしいものが幼児には容易に出来る」ことの一例である。しかし、これでもまだ「漢字学習は幼児期にはやさしい」ことが信じられないという方には、それを証明する徹底的な事実を披露しよう。それは、「幼児は、言葉がまだ覚えられないうちから、漢字は理解でき、覚えられる」ということである。

漢字は言葉よりも覚えやすい

一歳半の赤ちゃんだったら、普通、〝うんま〟〝まんま〟〝てーて〟〝たーた〟というような幼児語が三十～四十語言えるのがやっとである。ところが、生後十ヵ月頃から漢字カードで漢字を教えられた田中庸介君と又吉孝旨君は、一歳半の頃には、三百語の漢字を理解し、読んだのである。

二人とも私がそれを確認したばかりでなく、庸介君の場合は朝日新聞東京本社の記者が、孝旨君の場合は沖縄タイムスの記者が、それぞれこれを確認し、各新聞紙上にこれを報道している。明らかに、幼児にとっては、漢字の方が言葉よりも覚えやすいのである。

それは信じがたいくらい意外なことに思われるだろうが、よく考えてみれば、どなたにも納得できる理由が存在する。その第一は、言葉は口から発せられると同時に消滅してしまう存在なので、発せられた瞬間にこれをとらえ、かつ覚えなければならない。しかも、言葉は、いくつもの音声が一定の順序に並んで組立てられていて、最初の音声の正体さえはっきりとつかまえられないうちから、次々にとび出て来る異なった音声を、その順序を違えずに受け取り、かつ頭の中に貯えなければならないのである。

さらにその上、そういう音声の一定の連なりを聴覚中枢に貯える一方、それに対応する意味内容（多くは視覚的な存在）を別の感覚中枢に貯え、この両者を連絡させなければならない。言葉を覚えることは、このように大変な仕事なのである。

これに比べたら、漢字を覚えることなどお話にならぬくらいやさしい。例えば、〝花〟という漢字は、その内容である花そのものと同じ視覚的な存在であって、記憶に納まるまで、決して消えることなく待っていてくれる。だから必ず覚えられるのである。

また、言葉は時間的連続的な信号なので、それを聞いている間は一瞬の油断も許されない。途中の音声を一つでも受け取りそこねたらおしまいである。ところが、漢字は、一瞬のうちに把握できる空間的な図形である。しかも、その図形が頭の中に確実に納まるまで待っていてくれるのである。

だから、言葉だと三十か四十しか覚えられない幼児が、漢字だとその十倍も覚えられるのである。

言葉は漢字とともに学習せよ

言葉の覚えられない、重度の脳障害による精薄児を指導したことがある。物と、その物の名を表した漢字カードを一緒にして置き、漢字がその物の名前を示す符号であることを教える。例えば、花瓶の花に〝花〟という漢字のカードをぶらさげておき、「〝花〟が花を表している」ことを教えてやるのである。このような漢字カードを数枚教えてやった後、それぞれのカードを物と対応させて置く仕事を課す。すると、それまで全く光のなかった目をきらきらさせてこれをやる。精薄児も知的な作業は喜んでやるのである。

このような学習を、毎日、くり返し、くり返しやらせていると、ある日、突然、花を指さして「はな」と言い、〝花〟という漢字カードを指さして「はな！」と読むようになる。やさしい漢字の学習が、それよりむずかしい言葉の学習を成功に導いたのである。このように、漢字の学習は、言葉の学習を容易

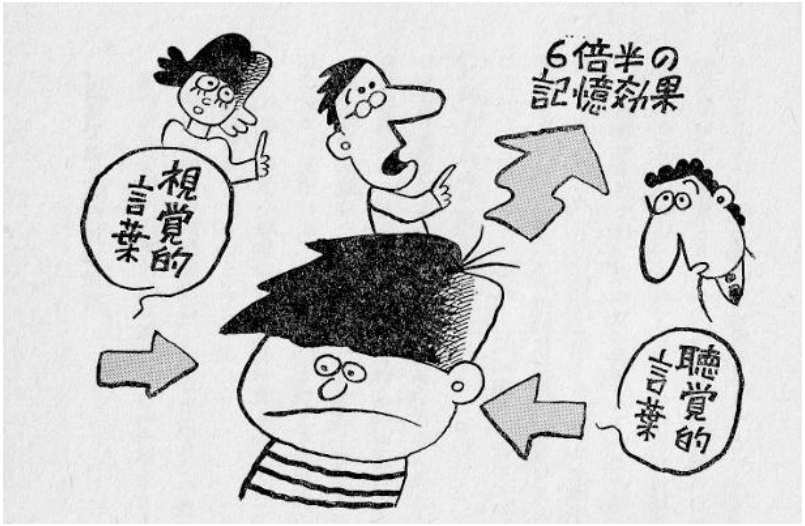
にする効果があるだけではない。言葉の理解を深めたり、記憶を確実なものにするのにも役立つ。

例えば、〝時刻と時間〟という言葉を漢字で学習すれば、その理解が正確で、かつ深いものになる。だから、漢字で学習した子供たちは、「明日の遠足の集合時間は八時三十分！」という教師の言葉の誤用を決して聞き逃さない。

古語で、物の突き出た所を表す言葉に〝はな〟という言葉がある。〝端〟という漢字がこの言葉の意味を表している。〝鼻〟は、顔の中に突き出た所であるから〝はな〟と呼んだものであろう。同様にして、〝花〟も、草木の茎や枝の突き出た所に咲くものであるから〝はな〟と呼んだものであろう。つまり、〝鼻〟は〝顔の端〟であり、〝花〟は〝茎や枝の端〟であり、端と花と鼻はもとは同じだったのである。

それを漢字で表す際、使い方の違いによって、これを区別して表した方が便利だ、ということで、それぞれ別の漢字を当てるようになったものである。それが今では、字が異なるために同音異語のように思われている。

このような言語は勿論、〝橋と箸〟〝釜と鎌〟〝歯と葉〟のような同音異語は、漢字と共に学習した方が解りやすく、かつ記憶にとどまりやすい。聴覚的な言葉に視覚的な文字を関係させて記憶すると、言葉だけでする記憶の六倍半の記憶効果がある、という調査結果もある。



昔から「百聞は一見に如かず」と言われているように、視覚的印象が聴覚的印象よりも強く優れ効果のあることは何人（なんぴと）も認めるところである。従って、その視覚と聴覚と結びついた記憶が、聴覚だけの記憶よりも強固なものになることは、言を俟（ま）たないであろう。

ところが、わが国の小学校では、〝じかん〟〝じこく〟というような〝かな〟表記で言葉の学習をさせている。表音文字であるかな表記では、〝時刻〟〝時間〟のような視覚文字の効果が出て来ない。だから、時刻と 時間の

概念の違いを教えているのにもかかわらず、理解が浅いため直に両者が混同してしまうのである。

“漢字で教える〟漢字教育

昭和三十八年に講談社から刊行した『一年生でも新聞が読める』という本で（本巻・第二巻Ⅰ）、「小学校一年生の漢字教育は、〝漢字を教える〟教育であってはならない。〝漢字で教える〟教育でなければならない」ということを説いた。

それは、学習心理学で言われる「覚えようとしないで覚えた記憶はいつまでも残るが、覚えようとして覚えた記憶は必ず失われる」ということに因る。

例えば、試験のために覚えようと努力して覚えた記憶は、試験が済めば覚えている必要がなくなるので自然に忘れられてしまう、というのが頭の本来の働きである。覚えるのが頭の働きなら、忘れるのも頭の働きである。だから、漢字学習を、覚えようとして覚えさせてはいけないのである。例えば、「試験をするから漢字をよく覚えて来なさい」というような形で行う学習では、試験が済めば忘れるのが当たり前である。これでは、「忘れるために漢字を学習する」ということになる。事実、どこの学校の教師でも、「テストの時には漢字が書けても作文やノート にはその漢字が書けない」と言って嘆く。「作文やノートに自然と使える」ような漢字力でなければ、真の漢字力ではない。

母国語の学習では、だれも「教えよう」と身構えて教える者はいないし、「学ぼう」「覚えよう」と努力する者もいない。それでいて、だれもが母国語に熟達するのである。それは、母国語が語られる実生活の中で自然と耳にし、耳にしている間に自然とそれを理解し、覚えてしまうからである。

このように、教える者に「教えよう」という意識がなく、学ぶ者に「学ぼう」「覚えよう」という意識がなく、自然と覚えだけ国語だから、「自然と使える」のが当たり前であろう。だから漢字の学習も、教える者が「漢字を教えよう」と思わず、また学ぶ者も「漢字を覚えよう」と思わずに自然と漢字を覚えさせるのに任せたら、作文やノートに自然と使える漢字力が養われるのである。

この教育法を、従来の「漢字を教える」漢字教育に対して、「漢字で教える」漢字教育というのである。「漢字で教える」漢字教育は、あらゆる領域の教育を〝漢字で〟行うだけのものであって、子供が漢字を覚 えようが覚えまいが、それは問題にしない。

〝漢字で教える〟とは……

この〝漢字〟ということを、具体的に述べてみよう。「手を洗う」という生活指導の場だとする。まず黒板に「手を洗う」と書く（園児たちは皆これらの字を全く知らないとする）。

幼児たちは好奇心が強いので、何を書くのだろうと思い、いたずらしている子でも黒板に目をやる。知らない字なので、「何だろう」と疑問に思う。そこで子供たちに向かい、黒板の文字を指さしながら、「今日は、〝手を洗う〟〝手を洗う〟ということで、大切なお話をします。皆さんは、どんな時に〝手を洗い〟ますか。はい、だれか言える人？」と発言をうながす。

黒板の字は何という字か説明しない。子供たちとの話のやりとりで、〝手を洗う〟という言葉を使う時だけ、いつもこの字を指さし示して、〝手を洗う〟と言うだけである。ただこれだけのことで、幼児たちは〝手を洗う〟という字を覚え、読めるようになるのである。次の日、〝手を洗う〟という字を手洗い場に掲示しておけば、子供たちは皆何のためらいもなく読む。

この場合最も大切なことは、漢字をさり気なく指さして読むことである。〝漢字を教える〟という気持を全く持たないことである。従って、子供たちがその漢字を覚えようが覚えなかろうが、決してそれを問題にしないことである。教師が問題にすれば、子供たちも漢字を意識する。そうなれば真の漢字力は身につかない。

〝漢字で教える〟という漢字教育法は、真の漢字力を養うために考え出された方法であるが、この教育の効果はそれ以外にもあることがわかった。それは、この教育を実践している間に、だれの目にもはっきりと見えるようになった大きな副産物なのである。

〝漢字で教える〟ことの効果

〝漢字で教える〟漢字教育は、漢字を覚えることを直接の目的としていないので、この教育により身についた漢字力は、真の漢字力と言えるものになる。それで、そういう漢字力を養うために、この教育法を幼稚園や保育園に実践してもらうように奨めて来た。

ところが、実践を始めた幼稚園や保育園から、次のような驚きの声を聞いたのである。「この教育を実践してわずか数か月にしかならないのに、従来の教育では得られなかった大きな教育効果が見えてきた。それは、幼児たちの集中力が著しく強まり、社会性もぐんと伸び、道徳性が向上したことである」

というものである。

それで、この教育がなぜ幼児をそのように著しく向上させるのであろうか、その理由をいろいろの面から考察してみた。その結果考えられたことはすでに触れたところであるが、「目と耳とで受容した記憶は、耳だけによる記憶の六倍半も強い」という調査報告のあることである。

幼稚園や保育園では、文字は幼児に読めないものとして、言葉により幼児の耳に訴えるだけである。それに対して、〝漢字で教える〟教育では、同時に幼児の目にも訴えることになるので、幼児は目と耳とを働かせて学習する。これが第一の理由である。

次に、総じて幼児というものは、目を絶えず動かし遊ばせていて、そのため、心も絶えずそれに伴って遊び動いている。だから、幼児の耳は「聞けども聞えず」という状態にあることが多い。大切なお話や注意が、幼児の心に届きにくい、というのはそのためである。ところが、常に〝漢字で〟幼児の目に訴える教育をしていると、幼児は、目を学習に参加させる習慣を次第につけていき、目が自然と落着くようになる。

だから、先生の大切なお話や注意が、よく心に滲みとおり、教育効果が顕れるのである。このような理由で、〝漢字で教える〟教育を始めると、わずかの期間で、子供たちの集中力が強まり、社会性が伸び、道徳性が向上するのだと思う。

漢字教育への反対論

幼児教育者たちが幼児の漢字教育を受け入れない最大の理由は「幼児期に漢字を習得しても小学校に進めば、幼児期に漢字を学習しなかったものと、全く同じになってしまう」という意見があることによる。そしてその意見を出したのが黒田実郎氏ということになっている。

正直に言って、私は黒田氏の発表を読んだ時、この発表が、幼児の漢字教育に反対する人たちの唯一の拠り所になろうとは、夢にも考えなかった。氏は「幼児期の漢字教育は無意味である」とは一言も言っていない。

黒田氏の発表は、昭和四十七年五月十三日大阪樟蔭女子大学における日本保育学会第二十五回大会でなされ、それはその時の研究発表論文に掲載されている。今、改めてこの発表を読んでみても、どうしてこれが反対論の根拠になるか、私には解らない。

この発表は、「幼稚園における漢字教育の効果に関する追跡研究」という標題で、副題に「認知能力の発達的観点から」と記されている。従って、この研究は「幼稚園における漢字教育が、幼児の認知能力にどのような影響を及ぼすか」について問題を提起したものであることが解る。

そして、本文には、「調査開始時には見られなかった両群の差（筆者注・図形テストを、漢字教育を実施している幼稚園とそうでない幼稚園の幼児に対して実施した所　両者に差がなかったことを指す）が、約一年後に至って統計的にも有意に認められた」という事実を述べ、「この結果から、漢字教育が図形テストで測定されるところの推理、知覚、空間因子の発達の面で効果を示すものではないか」という問題を提起しているのである。

つまり、黒田氏の発表は、「幼児の漢字教育は無意味である」というどころか「効果があった」とはっきり言っているのである。この発表の趣旨は、漢字教育の効果を述べるものであって、否定するものでは断じてない。

不可解な反対論

では、どうして黒田氏の研究が、幼児の漢字教育反対論の根拠になってしまったのか。私は次のように考える。黒田氏の発表の中には、確かに「追跡調査の最終段階である三年生に対して行った〝漢字テスト〟では、幼稚園で漢字教育を受けた子のグループと、受けなかった子のグループとの差は、わずかしかなく、有意の差は見られない」とある。

しかし、それは「図形（知能）テストでは、初め差がなかったのに、漢字教育を実施した後の調査では、有意の差が生じている」ということから、「漢字教育により、漢字をいくつ覚えた、覚えないというよりも、知能が向上したという事実の方が重大ではないか」という問題を提起するためのアクセントにしたのではないか。

黒田氏の研究発表の意図は、疑う余地もなく、「幼児期における漢字教育の効果は、漢字そのものよりも知能の向上をもたらす点にある」ことを主張することにあった。私はそれを確信する。そのことは、氏の発表の標題に「認知能力（知能）の発達的観点から」という副題をつけており、かつ〝知能の観点〟から観て、漢字教育を受けた子供たちの方が、明瞭に向上している事実を発表していることで解る。

そこで、知能の向上に有効なことを強調するため、ことさらに漢字テストには有意の差が出ないよう、工夫をしたのではあるまいか。そう考えるとつじつまが合う。

では、黒田氏の漢字テストには、どんな工夫がなされ、有意の差が出なかったのだろうか。それには、従来の漢字教育と、私の漢字教育との違いから、説明を始めなければならない。

私は、「〝鳩〟は〝鳥〟よりも覚えやすく、〝鳥〟は〝九〟よりも覚えやすい」という新しい漢字教育観をもっている。今の学校教育では、〝九〟は一年生で、〝鳥〟は二年生で学習するが、〝鳩〟は高校でなければ学習しない。しかし、私の漢字教育では、〝九〟よりも〝鳥〟よりも先に〝鳩〟を教える。

なぜなら、それが学習の自然の在り方だからであり、学習を容易にするからである。第一、〝鳥〟という名の鳥は世の中に存在しない。また、〝鳥〟という概念は、鳩や鶏や鶴などの体験を通して、初めて理解できる概念である。だから、〝鳩〟や〝鶏〟や〝鶴〟という言葉は、〝鳥〟よりも先に教えられるべき言葉なのである。このことは、漢字の場合でも全く同様である。

もしも疑問に思われたら、試みに、〝鳩〟と〝九〟という漢字を、幼児に同じ条件で数秒間見せ、教えてみられるがよい。翌日テストしてみて、幼児に読めるのは〝鳩〟であって、〝九〟は読めないことが解るはずである。〝九〟を覚えるのに必要な時間で〝鳩〟や〝蜂〟や〝猫〟などの漢字が、少なくとも十字は覚えられることが解るであろう。

だから、幼稚園で学習する漢字は、小学校や中学校では学習しないものが多い。それで、黒田氏の漢字テストではこういう漢字がすべて除外され、幼稚園で漢字を学習した子供も、学習しなかった子供も、全く同じ条件に置いたのである。

つまり、このテストに出題された漢字は、両者が小学校の三年間に学習した漢字の中から選ばれた。だから、両者が同じ成績になっても、少しも不思議はない。しかし、事実は、有意の差こそ出なかったが、差は出たのである。だから、これほどまでにして土俵を同じにすることに努力しても、なお差が出た、ということこそ重視されるべきであろう。

あわれむべき〝感情的〟反対論

数年前、月刊誌「現代」で、〝明日の教育を考える会〟が、「新・幼児教育宣言」を発表したその中で、「幼児期における文字教育の重要性は、まだ十分に一般の人たちにわかっていない。一般の人どこ

ろではない。わが国の教育に責任をもっているはずの、文部省にもわかっていないのである。（中略）

そして、幼稚園における文字教育に対して、なぜか感情的な反撥さえ感じられる」と述べ、さらに、「奇妙なのは、素人でもちょっと考えれば、その欠陥がすぐわかるような〝調査研究〟が、文字教育反対の唯一の学術的根拠に使われている、という事実である」と決めつけている。正にその通りである。

このように、根拠にならぬ〝調査研究〟を唯一の反対の根拠としているということは、結局、「反対すべき根拠が全くない」ということを表明しているようなものである。このような、〝感情的〟とも思われるような反対をしている人々に対しては、私は憎しみよりも、その頑迷さに憐れみを覚える。ただただ、先入的固定観念から解き放たれる日のあることを、神に祈るのみである。

幼児期に漢字が出来すぎると

漢字教育に反対ではないが、実践を躊躇している人々がいる。それは、漢字が読めるようになった子供たちが、小学校に進んで、仲間よりよく出来るということで、学習をばかにし怠けて、かえってだめな子供になりはしないか、と恐れるのである。

このような人たちは、漢字教育に反対する人々より多くいる。そしてこれが、幼児漢字教育の普及を大きく妨げているのである。しかし、このような考えを抱くということは、教育者としても最も恥ずべきことだと思う。

確かにそういう事実のあることは私も知っている。しかし、〝知っている〟ということと〝ばかにする〟ということとには因果関係はない。〝知っている〟から〝ばかにする〟のではなくて、〝ばかにする〟原因は他にある。

こういう子供は、知っていようが知っていまいが、出来ようが出来まいが、何事によらず高慢ちきで、真面目に努力することを軽茂する。〝知っている〟ということが原因で、学習をばかにするのでは断じてない。

私は三十年間、幼児や小学生を直接手に取って指導して来た。〝知っている〟〝出来る〟ということで学習をばかにし、怠ける子が全くなかったとは言わないが、それは極めて少なかった。それも既に断っているように直接の因果関係ではない。むしろ〝よく出来る子〟というのは、学習が好きで「よく出来るからもうやらなくてもよい」と言っても人一倍進んでやり、熱中してねばっこい子が多かった。だ

から、子供というものは「よく出来る子供ほど熱心に学習するものだ」と私は思っている。「よく出来れば必ず怠ける」ということだったら、よく出来る子を作る教育は出来ないことになるのではないか。

「このような考えを抱くことは、教育者として恥ずべきこと」と先に述べたのは、それが教育否定を意味するからである。

よく出来ても、怠けるどころか、益々努力するように指導するのが、教育者の務めである。それに子供の本性は、よく出来れば出来るほど、一層やりたがるものである。だから出来るように初めにその基礎を養っておいてやれば、あとはほっておいても進んでやり、向上する。

困るのは出来ない子である。出来ない、人より劣っている、ということを自覚した子はやりたがらないのである。やる気が起こらないのである。なだめ、すかして励ましてやっても気が沈んでいるから、うまく出来ない。うまく出来ないから益々やる気がなくなる。この悪循環を断つことは実にむずかしい。

幼児の漢字教育は、学習を好んでやる、益々向上してやまない子供を育てるのに最も良い方法だと私は確信している。くり返して言うが、私の漢字教育は〝漢字を教える〟漢字教育ではない。〝漢字で教える〟教育なのである。だから黒田氏が指摘しているように「漢字よりも、子供の知能が向上する」この教育に期待するものである。

縁なき衆生はお釈迦様でさえも救いがたいという。私ごときが〝縁〟もない教育者先生や学者先生に対して、どんなに努力して説法してみたところで、何の効果もないことは当然だと覚悟している。だから今までは〝縁〟あって私の漢字教育を求めて来られる方々に対してだけ、懸命に説いて来たつもりである。〝縁〟は異なもの味なもの、子供の頃のいろはがるたで親しんで来たこの言葉は、益々私の大好きな言葉になって来ている。

私の漢字教育は、幼児教育における最良の〝因〟の一つだと自負している。どうか、本誌のお蔭で、良き〝縁〟を得て、立派な〝果(成果)〟が結ばれることを期待し、念願して、稿を終える次第である。

（「幼児開発」昭和五十七年四月号）

対談・回想の漢字教育運動

対談者 吉田　昇（お茶の水女子大学教授）

私の漢字教育観

吉田　きょうは石井先生においでいただき「教育実践の底流」という連載対談の最終回にしたいわけです。いままでは実践家のかたの登場が多かったわけですが、石井先生は必ずしもそうではなくて、学者であってしかも教育実践に熱意を持たれ、有名な「石井方式の漢字教育」というようなことをおやりになっておられます。そういう実践への熱意を支えてきた基本に、いったいどういう発想がおありになるのかというようなことを、伺ってみたいと思います。

最初に石井方式というのが、いまどういうふうに発展しているかという話をしていただいて、それからお考えのほうに移っていきたいと思います。

石井　そうですね、いちばん先に発表しましたのは、昭和二十六年全日本国語教育協議会の全国大会で、東京都八王子の指導主事をしており、意見発表しました。そのときには、私自身、実践してはいなかったのです。自分の子どもに対する実験とか、単なるひとつの思いつきみたいなもので、こうやったらいいんじゃないかというような提案にしかすぎなかったわけです。

昭和二十八年に小学校の教師の資格をとりまして、二十八年の四月から一年生を担任し、二十六年に発表したことを、実際に実践に移していきました。それを四十一年まで続けたわけです。十四年間やりました。そして、その間いちおうやってきたものを、一冊の本にまとめました。それが『私の漢字教室』というはじめての著書なんですが、それが〝石井方式〟と呼ばれるようになったものなんです。

私はよく言うんですけれども、石井方式というのは、じつは不満なんです。石井方式と呼ばれたことが非常に残念なのです。というわけは、私の考えは、基本的にはきわめて常識的なだれもが当然考えなければならないものであって、そういう考えかたは外国では常識になっているんです。日本だけが国語教育で、ことに表記の問題ではいわば常識はずれのことをやっているわけなんです。常識的なもののほうが、やってみたら効果が上がった。これが昭和二十八年から三十六年に至るまでの私の実験でわかったものですから、それでそれを主張したわけです。ですから、石井方式ではなくて、これは常識中の常

識なんです。

社会で使われている漢字を

吉田　先生のお考えというのは、漢字というのをみんなが使っているんだし、それを別にして教え込むというわけではなくて、目に触れさせていくというのはあたりまえのことではないか。平仮名とか、片仮名とか言うほうが簡単なのではなくて、全体を模様みたいに子どもが見ているということが基礎にあって、はじめてそれの理解も出てくるのではないかというお考えですね。

石井　それはあとで結果としてそういうことがわかってきたんですけれども、私は社会で使っている表記というものを当然教えるのが、それが国語教育だという考えなんです。かりに漢字で書かれたものを学習するのが、子どもたちにとってたいへんだとしても、それを覚えるのが国語教育だと思うわけです。

たとえば「学校」という言葉は社会では漢字で表記しているわけです。ところが、社会で使わない「がっこう」なんていう表記を別に作るわけです。社会にない表記を別に作って教える。それに慣れさせて、あとで本物を教えるから、本物がなかなか身につかない。これは当然のことなんですね。どんな習慣でも、習慣というものは改めにくいものですから、本物を教えるべきである、これが私の主張のいちばん中心なんです。

最初、難しくても本物を教えるのが国語教育の立場である、ということでやったところが、案に相違して漢字のほうがやさしかったと、あとからそういう発見があったわけです。私は最初から漢字のほうがやさしいと思っていなかったんです。やはり一般に考えるように漢字のほうが難しいだろう、しかし、難しくても本物から教えるべきだ、という考えでやったところが、子どもたちは、いまの子どもは仮名はほとんど一年生にはいってくるときに覚えるんです。ところが、仮名をぜんぜん習得していないような子どもが、漢字と仮名といっしょに習いますと、漢字のほうを先に覚えてしまうわけです。それで、おや、これは漢字のほうがやさしいのかなということで、そのほうの研究をだんだん深めていったわけなんです。

「九」より「鳩」の方がやさしい……

吉田　どこの国でも実際に社会で使っている表記を教えるということはあるわけですけれども、その場

合にも順序があって、綴りの難しいのはあとにするとか、そのなかでの順序はありますね。先生の場合は、最初は順序まではいかなくて、とにかく本物をやらな ければならないという考え方でお始めになった。その点で誤解する人は、それはあまり教育的な発想ではなくて、もっと順序があるべきなんだから、要するに、時代に逆行することになりはしないかというような考えを持つ人があるかもしれません。ところが、実際おやりになっているなかで、漢字を教えるという場合だって、やはり教育的配慮というのはある程度必要だということになってくるわけですね。

石井　はじめやさしいものから難しいものにだんだん移っていこうということでやったわけなんです。

ところがこれも、われわれがやさしいと思うものが幼児には難しくて、われわれが難しいと思っているものが、かえって幼児は喜んでそちらを先に覚えるという結果が出てきたわけです。

よく私が例に引くんですが、「鳩」という字を分解しますと、「九」という字と「鳥」という字になりますが、従来は九がやさしいということで九から教えてそれから鳥に移り、そして九と鳥の合わさった鳩を教える。

これは、だれもが常識的にそう考えますけれども、実際に幼児に教えてみますと、鳩なら三歳の子どもでも覚える。これは例外なく覚えますね。ところが、九という字になりますと、なかなか覚えられない。逆に鳩から鳥を覚え、鳥から九というような、具象的なものからだんだんと抽象的なもの へ理解が進むというのが、幼児の理解の進み方でもあるということが、理論的にはいままでもいわれておったんですけれども、それを漢字の具体的な指導にあてはめてみると、じつは適用されなかったということが、いまになるとわかるわけです。鳥という言葉を理解するのでも、鳩を知り、鶴を知り、鶏を知らなければ、鳥という概念はつかめないんです。最初から鳥というものを理解させようとしても、どだい無理です。ですから、鳩とか、鶴とか、鶏などという言葉は、子どもたちはすぐ覚えます。字形が複雑だということは、認識の手がかりが一つふえるということなのです。文字を一つの符号として見る場合には、あまり簡単なものよりは、むしろ複雑なもののほうが、手がかりが多くて、しっかり覚えられるんですね。

吉田　このごろの子どもというのは、テレビを見ていていろいろ文字が出てきますと、マークみたいな形で覚えてしまうわけですね。かなり複雑な文字でも読める字が出てくる。

石井　むしろそういう複雑なものからだんだん、たとえば鶴と、鶏と、鳩を習いますと、そこに共通し

てある鳥という部分から、同時に鳥という概念を導き出す。そして鳥という言葉を理解するというように認識を育てていくのが、これが筋道だということも、やっていく間に発見したことなんです。

幼稚園を中心に次第に浸透

吉田　いまどのくらいに運動の広がりが出てきているわけですか。

石井　三年ほど前に、大阪のある幼稚園ではじめられた運動が、大阪でにわかに広がりまして、いまでは二、三百くらいの幼稚園、人数にすると一、二万人でしょうか、そのくらいのものが、この実験に参加しています。

吉田　小学校のほうはいかがですか。あまり普及しない……？

石井　あまり條及しません。

吉田　指導要領なんかがあって……？

石井　それが妨げですね。

吉田　先生が十四年間実践されて、ある程度いいということがわかっているんだから、それをやってみたくないという人は別ですけれども、やってみようという人はやれるようでないと困りますね。

石井　ところが、やろうという人たちが、校長に願い出ると校長がそれを押える。また校長がやろうと思っても、それを教育委員会が押えるというようなところが非常に強いんですね。指導要領にちゃんと忠実にやってくれればそれでけっこうだ、それ以上よけいなことをやるなという傾向が強くて、非常に残念に思うんです。

戦争体験が教育への情熱を育む

吉田　少し話を広げまして、先生が漢字教育に取り組もうとしたきっかけとか、あるいはそれをやっていかなければならないという使命感とか、そういうものがどういうふうにして発展してきたかということを伺いたいわけですが……。

石井　私は大学を出ると最初は学者になるつもりでした。しかし戦争中でしたから学問ができないで半年繰上げ卒業ということで、すぐに戦場へ出されました。当時のだれもが考えたように、国のために身をささげるということに、道を見出すよりしようがなかったわけです。それで、終戦までに、いくたび

か死ぬ可能性の多いような場面にぶつかったわけですが、結局終戦まで生きながらえました。

そしてその時、この敗戦を立て直すのに役立つということが、自分よりも先に死んでいった戦友たちに報いる道じゃないかということで、考えたのがやはり教育だと思ったわけなんです。そしてこの道でとにかく立て直さなければならない。それこそ石にかじりついてでも、日本を立て直さなければならないと考えました。最初母校の高等学校へ勤めたわけなんです。そして昭和二十四年に中学教師になりました。そこではじめて小学校からはいってきたばかりの中学生を実際に指導して、学力が非常に低いのに驚きました。ことに読み書き能力がそうなんです。それで、中学へ行きまして、いちばん先にした調査が、数学と社会科と理科の教科書に用いられている重要な言葉を、百語ずつ選びまして、それをテストしてみたら、半分しか読めないんですね。

これは小学校教育から考え直さなければならないということを、そのときに感じました。ところが、ちょうどそのころ教育委員会制度ができあがりまして、私は八王子におりましたから、八王子の教育委員会ができたその最初の指導主事にならないかという話があったものですから、これも一つの勉強だと思いまして、それで昭和二十六年に指導主事になりそれ以後小学校教育にたずさわるようになりました。

吉田　普通ほかの教科の字が読めないとかなんとかいわれると、国語教師のせいだなどといわれて、国語の先生はいっしょうけんめい書き取りばかりやらせる。そのところへ追い込まれると、結局生徒も書き取りばかりではいやなわけですから、うまくいかなくなって、おたおたするのが普通なんですが、そのとき先生は、下からくる小学校の段階が大事だというふうに考えられて下へおりていかれたというのが、教育的に考えて非常におもしろいですね。

さて、それでずっと長い間教育の仕事をおやりになっている場合に支えになっているのは、日本の教育をよくしなければならない、そして、学問のほうも学問のほうでやらなければならないんですけれども、同時に教育がなければ、学問というものも成り立たないとお考えになったわけですか。

石井　学問もなり立たないし、たとえば現在のように幼児教育で漢字をやりますと、よくいわれることは、幼児に対してはもっとすべきことがあるのではないか、たとえば情操教育だとか、道徳教育だとか、社会教育だとかと、いろいろなことを言うわけです。しかし、やはり基本は日本語というものを正しく理解し、その日本語を正しく盛るところの器である漢字というものの理解を、深めなければ、情操教育でも、道徳教育でもなんの教育でも成り立たない。そういうように私は考えるわけです。

吉田　昔の教育だと、読み書きというのと経験というのを分離して考えているわけですね。経験をやれば読み書きができなくなる。読み書きをやれば経験のほうがおろそかになるというふうに考えていたわけですけれども、実際はそうでなくて、経験というものも言葉があるから経験ができるので、ただなにかしているというんでは、経験にならないという問題ですね。その点は心理学では最近非常に気がついてきましたね。やはり言葉というものが媒介になるんだと。もちろん字だけではありませんけれども、全体の話し言葉を含めて、言葉というものなしで経験しても、から回りになってしまう。そういうことを実際にやるなかで気がつかれたということですね。

漢字で教える

石井　ですから、私ども三歳や四歳の子どもに、たとえば「熱い」という字を教えるにしても、牛乳びんに熱いという字を張りつけて、それに熱湯をそそいで子どもたちにそういうものを触れさせる。つまり熱いという経験と、熱いという文字を結びつけるというように努力しているわけなんです。熱いという字によって、熱いという経験がそこでよみがえらなかったならば、それはほんとうに読めたことにならない、つまり経験を、いうならば文字で整理するわけです。そしてまた経験というものを、いつでも文字によって代表させることができる。そうならなければ、ほんとうに漢字がものになったとは言えない。



吉田　そういう意味で、具体的な経験というのをおろそかにして、字ばかり教え込もうというのは、たいへん疑問なことでうっかりすると、いまの教育全体の流れは、経験の地盤なしで字を教えようとする、概念を教えようとしますね。

石井　まったくの経験を無視した文字で、文字の生命を無視した、単に機械的にそれが書けるようになればいいというような、テストに書ければそれでいいというような、こういう漢字力であるならば、これはまったく無意味で

あると思うのです。

吉田　そういう点で、幼稚園に広まっていけばいくけど、お母さんや先生がたがへたに誤解をして、とにかく字をたくさん覚え込ませればいいというふうになりかねない情勢は世の中にありますね。

石井　ですから、「漢字を教えてはならん、漢字で教えよ」、これは簡単な言葉ですけれども、これを私は幼稚園でやる先生にはひとつの合い言葉のようにしてもらっているんです。つまり「漢字を」というのと、「漢字で」という違いを先生に考えてもらう、こう思っているわけです。

ゼロ歳からの教育

吉田　実際に幼児や小学生、小さい子どもたちに接して、やはり教育というのが大事だということは、ますますお感じになっていらっしゃるわけですか。

石井　最近は幼児のほうをだんだんやってまいりますと、前のほうへ関心が出てくるわけです。高校ですと、その中学、中学だと小学校、小学校ではまた幼稚園、幼稚園だとそれじゃ、いまゼロ歳の子ということで、昨年幼児開発協会というものが財団法人として誕生いたしまして、そのほうに関係しているんです。これからはゼロ歳からの教育というようなことに、私どもは注意を向けなければいけない。あまりこの面の研究がなされておりませんね。

吉田　幼児というのはもっと伸びる力があるし、小学校でもそうなんですけれども、学習と教育というものがかみ合わないまま、もちろんぜんぜん教えないで伸びるはずはないんですけれども、かみ合わないまま進んでいるところに、いちばん問題があるような気がします。

幼児の読字能力は早まっている

石井　私どもがやっている漢字教育というものは、従来から見るとずいぶん時期が早まっています。ですから、あれは早期教育だとひと口にいうんですけれども、私どもは早期教育などというものはあり得ないと思っています。このあいた就学前の幼児の読字能力の調査の発表が国立国語研究所でありましたけれども、あれを見ますと、四歳児で昭和二十六年の調査における小学校一年生と同じですね。二年早まっています。それは、さらに調査してみると、家庭では文字を積極的に教えていない、幼稚園でも教えていない。

にもかかわらず、覚えているというのは、子どもたちは明らかにそれを求めている。だからいつとはなしに覚える。まったく教育をしないのに、子どもたちが現状では字を覚えているわけです。私どもはそれを、もう適切な時期にはいっているから、それらの子どもに合ったものを与えよう、それが私のいう三歳からの漢字教育なんですが、なかなかそういうぐあいにとってくれないところに、この運動がもうひとつ伸び悩んでいる理由があると思うんです。

吉田　うまく伸びていない理由の一つには、みんなが同じように伸びなければならないというふうに考えているのが一般の通念で、三歳になっても、そういうものを求めている程度がずいぶん違うわけですね。そういう意味で、石井先生はどのくらい字を覚えたかというような評価をしないで、覚えれば覚えるでいいという形でやっていこうとなされているわけで、それは非常にいいと思うんですけれども、なにかあの子はこれだけ字を覚えた、うちの子は覚えない。

覚えない理由は、具体的なものと話し言葉、そこが結びついていなければ字を覚えるというところまでいかないわけですね。子どもによってずいぶん差があるということを考えるんですけれども。

石井　たしかに個人差がありますけれども、私どもの実験によりますと、三歳で覚えられない子どもは現在のところないということなんです。三歳児に対する実験というのはまだ非常に数が少ないんです。ただ、私どものやっております三歳児の実験では、みんな応じますね。漢字に対してぜんぜん興味を示さないという子どもは、小学校の一年生でまったく文字というものに関心を示さないパーセンテージと、ほとんど変わりないです。その意味で、私は三歳児というものは、もうはじめなければならない時期だというふうに考えているんです。

文化遺産の継承のために

吉田　いま読み書き、とくに漢字の話だったわけですが、教育問題としてはただ読み書きだけではなくて、もう少し精神的な面とか、理想とか、そういう問題がいろいろあると思うのですけれども、そういうものについて先生はどういうふうに考えていらっしゃいますか。

石井　かつて藤堂さんと読書新聞で論争したことがあるんです。それは漢字の問題なんです。漢字をどのような感度で学ぶかということなんですけれども、つまり藤堂さんは、「いろいろ学習する手段としての漢字というものを考えるか、それとも現在の段階におけるコミュニケーションを中心として考える

か、あるいは過去の文化遺産を受け継ぐ手段としてものを考えるか、そういうことによって漢字に対する考えも変わってくる」という議論をなすっていました。私は、これら二つのものは同じなんだ、これを別々のものとして考えるのはおかしい。これからのことを考えるには、まず一番目に過去のことをじゅうぶんに研究して、過去のことをそのまま受け継いで、いままでの教育というものをじゅうぶんに知ることが、次の段階の足がかりになるんだ。過去のことをじゅうぶんに知らないで、ただそこで現在あるものから、どういう方向にでもいい、進めていこうと考えると、これはほんとうの意味の進歩ということはあり得ないと思う」と答えたわけです。

私はそういう意味で、できるだけ過去のものが短時間に吸収できる、その能力の中心はやはり漢字力だと思うのです。正しく漢字というものを身につけて、深く漢字の持っている意味を身につけておれば、短時間で過去の文化遺産というものを吸収することができるわけです。そうした上で、それから自然と自分の批判的な考えというものが出てくると思います。

現在におけるわれわれ人間の行動というものは、できるだけ過去の文化遺産というものをじゅうぶんに消化しきったものほど、ほんとうにこれからの力強い日本の将来を作っていくんじゃないか、そういうように思います。

吉田　その考え方というのはわかるような気もするんですが、他面たとえば自然科学を学ぶというふうなことも、非常に必要ですね。自然科学を学ぶ場合に、漢字を使って学ぶのか、これはむしろヨーロッパででき上がってきた文化ですね。中国にないとは申しませんけれども、現在のところやっているのはそういう文化なのですが、それを学ぶ場合に漢字を使っていることが、むしろかえって理解を妨げるんじゃないかという問題もあるわけです。その場合は現実に使っているんだからそれを知っておかなければならないという発想で先生はお考えになっているわけですか……。

石井　少なくとも初歩の段階においては、漢字、仮名まじり文という日本文になった書物、そういう手引書というものをまずじゅうぶんに読みこなせなかったならば、これはやはり進めないと思うのです。それは欧米の原典を直接に読むということ、それはもちろんのことですけれども、そこへ行く手前に日本文で書かれたもの、そういったものはおそらく私は一生必要じゃないかと思うのです。

日本人にとって漢字とは

吉田　もう少し進んでいうと、日本人が漢字を使っているのが、ひとつの日本的なものの考え方というふうなものにもプラスになっているし、独創的な、ほかの国とはまた違った特色というのを発揮するであろうというふうなことになるわけですが、漢字のなかにはやはり東洋的な精神みたいなものが自然にはいってくるので、べつにことさら東洋精神とかなんとかいうよりも、やはり漢字を通してそういう味わいみたいなものを与えていくことのほうが基本だというお考えなんですか。

石井　漢字の持っているいろいろな東洋的な思想、そういったものも大事ですけれども、現代の科学的なものでもなんでも、書かれたものを吸収する力において、漢字と仮名をうまく使った表記というものは、世界独特ですね。私は中国のものをやっていますから感じるんですけれども、漢字ばかり並んだものは、読みにくくてしょうがない。そしてじつに読み取りにくいんですね。誤解も非常に生れやすいんです。

ところが、漢字、仮名まじり文というのは、漢字と仮名というものがじつにうまく配合されていまして、パッと見て正しく読み取りやすい。そういう点で、先年チョムスキーが来たときに、「私は日本語についてはじゅうぶんな知識を持たないので、自信を持っては言えないけれども、あの漢字、仮名まじり文というのは、世界でもっとも能率的な表記方式なのかもしれない」という発言をしたのを知りまして、まさに我が意を得たりと思いました。

吉田　漢字、仮名まじり文というのがたいへん能率的なのは、なんか慣れているせいか私もそういう気がするわけですけれども、しかし、それと同時に教育というのが最近能率的になり過ぎていて、流行性みたいなものばかりで評価される。教育というのはそういう面でないものもあるんではないかという問題が出ているわけですけれども、先生自身は自分の思想とか、そういうものの寄りどころはどういうところに求めますか。

論語を心の糧として

石井　昔からの古典を最初から大事にする。最初に子供たちに与える文章のなかにも、長い間日本人を育ててきた、そういったもの、定評あるものを早くから与えるということが私は大事だと思っているんです。かりにそのときにまったくわからなくても、いいとさえ私は思います。

たとえば有名な論語などは、いつの時代にも人間の心構えとして、支えになるというふうに考えます。私は小さなときからそういうものを、よくわからなくてもいいから、読んでいる間に心の中で育っていくというような形でもいいから、与えるべきであるということを考えています。

吉田　先生ご自身も四書五経を、小さいときから習ってこられたわけですか。

石井　ええ。

吉田　論語とか儒教的な発想とかいうのは、このごろたいへん悪くいわれているわけですが、それも大事なものの一つだと思うんですけれども……。

石井　私は儒教の精神のなかに、もちろんいまの世の中になくてはならない重要なものがあると思うんです。それはほんとうに読んでみさえすれば、よほど新しい人でも、ああこんなことを孔子は言っていたのかといって、再認識してくれるだろうと思うんです。そういうようなものを小さなときからみんなで、持っていくべきじゃないかと思います。

吉田　ただ、やはり日本自身のなかでいろいろ、儒教からはいってきたものもあれば、仏教からはいってきたものもあれば、ヨーロッパからきたものもある。それがどう一体化するのか、あまり明朗で、なにがなんだかわからないというのも困るわけです。そこらへんのところが教育の基本問題の一つでしょうね。しかし、いずれにしても、差しあたり読み書きというのをきちんとやって、脱落者を出さないように、全部の人が読めるように、しかも楽しく読み書きがやれるようにという、石井さんの独特のご発想でこれが実験によってやられているし、実際やって効果があるという形で普及している。

これはやはり日本の教育に一つの大きな提案をされている問題だというふうに考えるわけです。日本の敗戦以来、字をきちんとやることがまずなにより基本だというお考えで進まれてきたことには、たいへん感心させられているし、これからも大いに活躍していただきたいというふうに思っております。どうもありがとうございました。

（「教育技術」昭和四十六年三月号）